

Title	ディスカッション
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 1 p.17-p.24
Issue Date	1998-12-09
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10467
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



ら学校に来なさい」と上手く言えないので悩んでいたということなのですか。(寺田同意) 栗田さんは「学校というものがある」ということはあまり関係ないということですよ。(栗田同意)「今の」でなくても学校制度というようなものは無くなってくても構わないという点が栗田さんにはありますよね。

栗田：生徒の立場としては所与のものとして学校を捕らえざるを得ないので、シンボリックな意味での 大人 が「学校とはこうあるべき」でそれをどう伝えるかとか、(この問題に関して)「子供にどう接するべきか」といような問いを、やっぱり 子供 の立場からは出せないということ(報告の際の)立場として持ったつもりです。

竹内：とても私には明瞭になりました。

寺田：補足しますが、学校という場には、いろいろ問題もあるし、私が報告したような問題でなくても、もっと小さい部分でもさらに問題は沢山あると思います。例えば、校則とか制服とかあって非常に息苦しいですよ。そういった、学校がほとんど変化していないために生まれる社会とのずれから不登校などの現象が起こっているのかなという漠然とした考えがあります。

不登校の生徒達が苦しみを感じていることはあるだろうし、それはそれで考えなければならないことだと思うのですが、いま学校という場に上手く適応できていて、そこでいろいろな経験をして、いろいろな意味で成長する生徒もいるということは認識しておかなければならないと思います。

ちょっと話が飛びますが、例えば私の勤めていた学校には合唱コンクールというのがありました。男子校で男ばかりで歌うなんて面白くなさそうですが、驚くほどレベルの高い合唱をするんですね。

率先する生徒がいる場合には、全部自分たちで仕切って合唱を作っていて、本格的な合唱組曲なんかをちゃんとやるんです。そうやってゆく中で、例えばリーダーになる生徒はリーダーとしていろいろなことを学ぶわけですよ。そして、それについてゆく生徒たちは自分の役割を果たして協力してゆくということを学び、それに合唱は一人ではできませんから、合唱をやるという中で「みんなじゃないとできないこと」をやる喜びを味わうと思うんです。すごくいい経験だと思います。

でも、一方では合唱にあまり興味がなかったり、合唱のようなみんなで一斉に何かをするということに嫌悪感を持つてる子もいるし、そういう子が多いクラスでは「自主活動への強制」みたいなことになって、これはあまり良くない教育の形態なのではないだろうかと反省することもあるんですね。ですから、伝統とかそういったものによってちゃんと場ができているときには、いつも二重の、つまり一方ではそういった場を利用して良い経験をさせてやりたいと思いながら、でももう一つ下のレベルでは心苦しさを感ずるということがよくあります。

鷲田：さっき竹内君がしてくれた質問というのは、ちょっと言葉を変えて改めて寺田さんに提出するとういうことになると思います。つまり、「学校に行かない」という事態が、今かつてなかったような形で量的にも起こっている。かつては「学校とは行くものである」とか「学校は休まないのが普通である」といった考え方があったと思う。それが今、上手く成り立たなくなっていると考えるときに、規律に従うとか授業中には黙っているとかが人が喋っているときにはこちらは黙って聞くとかが、そういったいわゆる道徳的に基本的なことが、学校とは関係なしに崩れているから学校という場で本来あるべき形が維持できなくなっているとお考えなのか、学校が本来やるべきことをやっていないあるいはできなくなっているから「学校に行かない」という事態が発生しているとお考えなのか、どちらのお考えなのでしょう。

寺田：話をちゃんと聞くとかいったことができていないのは、学校が本来の機能を果たしていないからではなくて、他の要素がいろいろあると思います。社会全体の動向もあるだろうし。さっきもお話したように、学校が本来の姿をしていないから、だから不登校が出てくるだとか遅刻が多いだとか、そういうことではないと思います。

(司会、本間に交代)

「不登校」の位置づけをめぐる

西村：学校で行なわれる教育をあえて学校教育と呼ぶとすれば、学校教育を語る際に不登校というのは一体どういう位置付けで語られるのかというのがまず大きな問題です。学校教育にとって不登校というものが果たして本質的な問題なのだろうかとか単純に思うんです。不登校というのはいわゆる集団の教育からあふれ出てしまったというような...

寺田さんにお伺いしたいんですけども、不登校が学校教育の本質的な部分を映しだす鏡として不登校を語っていらっしゃるのか、むしろ、ただ学校教育を語る際の切り口として不登校というものを取り上げておられるのか。提題者の方の共通の理解があたりだと思つたので、学校教育のなかでの不登校の位置付けというものをどうお考えなのかということをお尋ねしたいなと思つた。

それと、むしろそれを肯定的に読み替えて、学校教育が上手くいってる状態というのはどうということなのかを、お尋ねしたいと思つたんですが、それは後に置きます。



寺田：非常に本質的な質問だと思つたんですけども、特に公教育の中での不登校の位置付けというのはあまり考えていません。不登校という、数は少ないけれども、不登校ということをお前にしたときに一人の教員として考えざるをえなかったことを語ったので、不登校という現象の学校教育の中の意味とかいうことを突き詰めてこの三人の提題を考えたわけではありません。私自身は、不登校は学校教育を考える上で本質的な問題だと思いま

すが、単なる材料として取り上げることに抵抗があります。特に、畑さんや栗田さんの場合は、学校教育を単なる切り口とか単なるヒントとして取り上げたのではないと思つた。

栗田：学校教育の中で不登校の位置づけがどうなっているのか、というのは、位置が高いというのはどういうことなのか、低いとはどういうことなのか、大きく占めているとか、まったくないとはどういうことなのか、それは誰にとって大事な問題なのか、教える側にとってからなのか教えられる側にとってからなのか、どちらの立場からのものとして学校教育という言葉が使われているのかわからないので今の時点では答えられません。

畑：私の場合は不登校という行動を起こしている子供の親という立場から見える学校とか学校教育という視点で話しているのだから、学校教育という課題設定をしているつもりは初めから比較のないんです。学校教育というものの中から見ると非常に違った見え方をするだろうということは想像がつくんですけど、そういう見方ではなくてむしろ、学校教育っていうと本当は生徒と先生に限定できるはずなのに、不登校という問題が起こると家庭とか親とかその他の社会環境とかがすべてひっくるめられたようなひとつの現象として捉えられる。で、そういうところに身を置いてみたときの学校というのがどういう風に見えるかということです。それが逆にそういう視点からの見え方というのが学校教育とか教育というものの中で少し違った材料になるのではないかなと思つて報告したわけなんです。

高井：私の子供も不登校をしましたので、私は親の立場で話された畑さんのお話が一番良くわかりました。新聞では臨床哲学って身近な生活の問題を哲学するって書いてあって、今日も身近な問題かなって思つたんですけど、私の頭のあたりで蝶が飛んでいるような抽象的な感じでお話聞いていたんです。

高校時代教会にいらつたんです。その牧師さんがココア飲みに来てくれていたりして、非常に雰囲気家庭的でした。田舎の小さな教会だから、お婆さんがぼつと一人来ていたりとか、大学の生徒さんが来ていたりするわけなんですけど、そこには自分の居場所があると思つたんです。というのは世の中の物差しがないんです。その物差しのない空間でほっとできて、自分にはそ

う空間があるから、あんまり好きではなかったけど中学にも高校にも通い続けられたかなって今にして思うんです。私の息子が中学三年で不登校しましたのは、「学校にはぼくの居場所がない」っていうんですよ。私は不登校はそんな難しい問題とは思っていません。例えば、会社のサラリーマンの方でも行けなくなりますよね。そこには自分が合わないように感じてね。だから、私は居場所が問題じゃないかと思うんです。今の世の中ってみんな物差しで計るから、そのために一生懸命頑張っ、勉強していい会社に入ろうと思う人もいるし、そういうのが嫌いだからといってやめる人もいるし...。だから、私はあんまり難しい次元で人を語ってほしくないなって思います。もっと人間のあり方という根本的なもの、そのあたりで彼らは学校には居場所がなかったから、その時点で行かなくなってるだけのことでね。親の立場としては、もっと身近な問題として、不登校をしている子は特別な子だっていう見方じゃなくって研究なり考えるなりしてほしいなと思いました。

栗田：居場所の問題ということでさっき竹内さんがおっしゃってた、居場所がたまたま見つければそれで解決する問題なのか、ということと、いま（高井さんが）おっしゃったことがパラレルな関係にあるなあ...。誰にとっての解決なのかという問題なんだと思うんですよね。はっきりいって、子供の立場で語った私としては居場所がたまたま見つければ確かに解決です。とりあえずあるものとして与えられた教育に右往左往して、例えば、修道院なり通信制の高校なり、さらにここの研究室なりが居場所になって、私の人生の中ではそれは解決していつている、解決しつつあるということは確か、そこを抜かして語るというのは私もおかしいとは思いますが。そういう感覚なくして、つまり不登校の子供を見ずしてマスメディアが語る言説がすごく苦しかったということをお願いしたいのはそこで、居場所が見つければいいじゃないかという開き直った気分が私の中にあるのも事実です。ただ、こういうディスカッションで親御さんの立場とか先生をしている立場にあるという人の話を聞いて、教える側として何かをしたい、と思うのも、ああそれもあるんだなと思ったのが、正直な感想です。私もそんなに難しい問題として、抽象的な言葉を操って、それでわかったような気になるというのはいやだ、と思います。ただ、...特に寺田さんの話を聞いて感じたことなんですけど、とまどってカウンセラーにも頼って右往左

往している先生の姿ともつながる言葉を持ちたい、そういう先生、ある意味で私のことを理解してくれなかった先生と共通の言葉を持ちたい。私にとっては居場所が見つければOKなんですけれども、そういう先生とも仲良くなりたいという気持ちで私はこのディスカッションに参加したんですけれども、これでお答えになっているのでしょうか。

学校の力が強くなったのか？

西川：今日は不登校という問題で話しが進んでいきますけれども、ぼくは1960年代、高校でまだ学生運動の残り火があった時期にちょっと学生運動に関わりを持ってまして、通常の高校生としてのあり方をせずに、学校と親から「学校やめなさい」と言われたわけですね。で、一度高校を退学して、もう一度高校に行きなおいしたわけですけど、二度目の行き方はかなりいい加減なもので、自分の行きたい授業にしかいかず、きっちり規定の三分の一だけは嫌いな授業にも出ると、そういう行き方をしたわけですね。で、例えば、学生たちが大学でも高校でも学校という場に対して反抗の時代と、今の不登校という事柄とは何らかの形でつながりがあるんじゃないかと思うんです。ぼくが今の時代であればきっと不登校になってるであろう、と。あの当時はひとつの社会的な問題としてとらえられていたものが今はきわめて個人的なところで論議されている。それは一つには学校の力が強くなってきている、学校そのものがね。以前は、不適応の学生に対しては停学とか退学処分という形で対応してきたわけですが、今はそうじゃなくて不登校の学生をどうするか、カウンセリングでもしてみるか、とかね、全然ちがうでしょ。そのへんの問題が時代の推移の中でどんな風にならなくなってきたのか、学校というもの、その持っている問題がどんな風に、本当に変質して来ているのか、それとも何がこういう風に形を変えてきているのか、というところを少し議論できたらなあと思うんですけれども。

畑：私も同じ世代で、よくわかります。この研究会を企画した人たちといろんなディスカッションしまして、自分の高校時代のことを話したんですが、安田講堂事件や佐世保にエンタープライズが来て騒然となっていた時代でした、高校紛争というのがあって、職員室ロックアウト40日間、機動

隊が入るか入らないかの瀬戸際、高3は早く試験を受けないと大学受験の内申書が出ません、というような。みんなでデモに行くとき、先生たちが「一人も逮捕されなくて帰ってくるんだぞ」と見送ってくれたりしましてね。栗田さんが、そんなんだったら私は不登校にならなかったんじゃないか、というような話がありました。そのことと私自身の息子の不登校のことと関連させて考えると、今不登校を起こしている子達はまったく横につながらない、個的なんですね。それは彼らが持たないのと、何か持たないようにしくまれているのと両方あるみたいで、だからこそカウンセリングのような解決の仕方が、もっとそういう芽を摘んでしまうというような非常に個的な、生育歴とかにもっていかれるという危惧がありましたね。学生運動のところにはっきりとした反体制の意識がありましたが、今の子はそういう概念を持たない。で、少年犯罪とかいうのも反体制的意識を持ってないがために起こっているんじゃないかという気がして、やっぱり個人とか家庭というものと社会とか学校というものの両方に原因があるような気がします。

西川：学校の力はすごく強くなっているね。

畑：すごく強くなっていますね。初めから分断されていて、それで自分が苦しいと感じる仕組みを人と連帯して確認しようということが全然持てないということは、すごく大きいことです。来るなというメッセージというのもあるような気がします。何か外の社会から「来るな」といわれているという感じがあると思うんです。

西川：昔は教師対生徒だとか教師対学生という対立構造とか単純に考えられてきたのに、今はそうじゃなくて、教師も学生も、学校という所は一つの価値観で固まって、それに対して一人で刃向かうという構図になってしまっているところが昔とは違うんじゃないか。学校というのは、今一番、言ってみれば調教するとか、制度的なものとしては完成されている時代なのかなあ、と。だからこそ、そういう問題が不登校という形で個人のレベルで論議されるような問題になってる気がするんですね。それを本当に個人の問題としてどう捉えていこうというのは違うだろうという反省をもつとして、じゃあ何が可能なのか。今、立看板立てても学生なかなか集まりませんよね。では一体、これから何が可能な道として残っているのか。不

登校という生き方が一人の個人の生き方としてじゃなくて何らかの形でまた力を持つことがあるのか。以前の学生運動がどうして挫折したのか、ということも考えないとだめなんですよ。

本間：学校の力が強くなったということばの意味なんですけれども、一方で例えば学校は不登校児を学校の問題として何とか解決したいということでしょうか。

西川：だからですね、かつては、学校のあり方へのアンチ・テーゼみたいな事柄が学校を脅かすような攻撃的な力を持っていて、学校の側もそれに身構える必要があった。今の不登校という形で学校の内側に抱え込まれる問題となっていると思うんですね。

大久保：私は、体制・反体制という捉え方はあまりに図式的過ぎるかなという感じを受けているんですね。学校の側はむしろいろんな要求の前に無限後退しているという感じを非常に強く受けています。だから学校はかつてに比べて、はるかに囲い込む力を失いつつあるのではないかと。自分が教員をやっていたときに周りの同僚を見て、自分が生徒だったころに比べて、なんて物わかりのいい人たちなんだろうと思ってびっくりしたくらいなんです。むしろそれには自分が教員になったという立場の違いもあるんでしょうけれども、少なくとも彼らは自分に与えられた職分の中で、問題に誠実に対応しようとしているという部分があると思います。単純に、囲い込むとか見えない力が強くなったということが言えるのかという感じを受けます。



「連帯」して何かをするということ

寺田：切り込み方がよく分からないのですが、ヒントになるかもしれないのと言うと、例えば生徒会等が何らかの要求を掲げて教員団と対峙するという事はないですね。たまたま活発なメンバーに恵まれていれば、「制服なんとかしてくれ」というような運動が起こることがある。そうしたとき、比較的若い教員はシンパシーを持ちますが、年輩の先生方は、たぶん学生運動のことを思い出すのだと思うのですが、非常に敏感に早くその動きを摘もうとする。

畑：そういうことを知らない、ということもあるのではないのでしょうか。

栗田：連帯というのは、とてもぜいたくなものだと思います。さきほどの合唱コンクールの話が関連してくるのかと思いますが、つまり、共同でなすよるこび、人間が一人ではできないことを追求できるということ、そういったことに対して、私は「自主活動への強制」をととても感じる子どもだったんです。だから、下手に一緒にやらされるくらいなら一人でいたほうがましだと思っていました。連帯するということに、大人はすごく喜びを感じていて、それを味わわせてあげたいと思って私たちにやってくれるのだけれど、それは強制になってしまっている。私は運動会とかもあまり好きではない子どもでした。別にかっこが遅いというような理由ではなくて、束ねられていくのが嫌いだったんです。運動会なんて、生徒の立場から見るとよくわかるのですが、好きな子もいるし、嫌いな子もいます。好きな子もいるということは否定できない、けれど、なぜそうして共同でやらせるのだろうか、ということに答えを出す大人がいなかった。本当に自主的に集まって、演劇をしたり、何かを企画したりするというのは喜びなのだけれど、それをすばらしいものとして大人が語って、「今は失われている」と言われると、子どもの立場ではとてもつらいです。ぜいたくな喜びという感じがします、連帯して動く喜びというのは。

本間：「居場所がない」というのは、例えば、連帯というような場所が見つけれられない、ということなのでしょう。

栗田：「居場所」というのは、連帯までいかない。

一対一でもいいんです。一対一でも連帯といえれば連帯かもしれないのですが。私の中では、一人でもいいからという切実な感覚から居場所という言葉が出てきました。それがもっといっばいできて居場所感覚が得られて、さらにその上で連帯という方に行くというイメージが、私の中では強いです。



「学校」を前提に考えることの問題

土屋：今までのお話はすごく興味深くて、いろいろ考えていたのですが、不登校ということをおのうに、みんなで語り合ってしまうことの問題性、つまり、不登校を通して学校を語るということではなくて、不登校自体がテーマになってしまうこと、不登校をある種の問題として考えてしまうこと自体が不登校に苦しんでいる人をよけいに苦しめてしまうという逆説的なものをすごく感じます。というのは、今日のお話で印象的だったのは、みんなが学校というものに一枚岩の価値観を持っていることで、そこからはずれるとどこにも居場所がなくなってしまう、ということで、この構造をなんとかしなければならぬと思うわけです。けれど、それをなんとかしなければならぬと言った場合に、不登校の語り方が重要になってくる。

たとえば、クラスの三分の二が不登校になってしまったら、不登校は問題ではなくなってしまう気がするのです。少なくともそんなに苦しむものではなくなる。本来、学校にはいろいろな形がありうるはずなのに、しかし我々がイメージする学校というものは、みんな同じだということに問題があるのだと思います。今の制度では小中高とといった形でできているのですが、学校というものはそもそもこうでないといけぬのか、というあたりを見直していった方がいいのかもしれないという感想を持ちました。たぶん、それは、元締め

である文部省といったところに行き着くのでしょ
うけど、反体制とかいうこととちょっとちがった
意味で、なぜこれほどみんな同じにしてしまうの
だろうというところに、私自身は目を向けたい。

それは学校というのが非常に力を持っていて、
みんなが行くから不登校が逆に問題になってしま
う。それは図と地のようなもので、両方あるのに、
片方だけ、つまり、不登校の方ばかり見ていると、
どんどん苦しくなっていくだろうという気がする。
もっと簡単に言ってしまうえば、不登校なんて何が
問題なの、という世界では、不登校は全然苦しく
ない、問題にならないと思います。

徳永：その話でいえば、例えばフリースクール等
ができ初めていますが、それだって今のフリース
クールのあり方は、いわば学校という制度からこ
ぼれ落ちてしまった者への最小限の救済センター
程度の位置づけでしかない。初めから、子どもが
大人になっていくのに学校でなくていいじゃない
か、というぐらいのことを我々は言えないのだろ
うか。例えば、学校というのは、近代化の中で、
制度的にここまで成熟しすぎてしまったのかもしれ
ないけれど、もとをたどれば、村の小さな寺子
屋とか、西洋では教会とか、そういったレベルで
いくつもチャンネルがあったのが、学校制度とし
て洗練されすぎてしまった。洗練されすぎてし
まったから、枠が決まってしまって、その枠が見
えてしまった人にとってはつらい時代になってき
た。先ほど、土屋さんがおっしゃったことと言え
ば、不登校であることが問題ですらないというよ
うな状況、学校はあるけれども行かないなら行か
ないで大人になる方法はいくらでもある、といっ
た柔らかい土壌をもっと作れないのか。学校の単
位認定といった制度自体は今のままでいいのか、
あるいは、フリースクール的なもので、そこでわ
いわいやっていたら勉強の場になっているといっ
た状況は作れないのか。ですから、もし不登校を
考えるのでしたら、学校という枠をどのように改
善していくかということよりも、学校の枠自体を
常識として見るのをやめてしまうことの方が、あ
る意味では、解決ではないか、解決に近づく可能
性があるという気がします。

本間：学校というところを通らないでも大人に
なるとおっしゃいましたが、そうすると、今の
「大人」は学校を通り抜けた、つまり学校のみを通
して作り上げられた「大人」であるということに
なりますね。多元的な大人へのなり方というもの

を、学校というものが一元化しているのだと仮定
して、もしそれが変わるのならば「大人」という
ものも変わることになりますよね。

徳永：変わるでしょうね。だけど、その大人の定
義ははっきりしているわけではなくて、とっさに
使った言葉です。

「学校」から離れて考えられるのか

寺田：(土屋さん、徳永さんに答える形で)学校と
いう枠をはずすと、問題が問題にならなくなるの
ではないか、ということはわかるけれども、実際
に不登校の子を目の前にしては、そこからはじま
らないのではないのでしょうか。

徳永：不登校の子や親は、二重に苦しんでいると
思います。不登校になったことそれ自体と、不登
校になったことが今の社会ではいけないことなの
だ、という罪悪感にです。その二番目の苦しみは
取り除いていけると思います。不登校は悪いこと
なのだと感じなくてもいい雰囲気作りということ
です。そのためには、社会の人々が「そういう気
持ちになるのも無理はない」と言えるようになる
こと、それでも勉強はしたいという人のために、
フリースクールや通信制といった回路づくりを充
実させること、またそのための情報提供などが大
切だし、現実的にしていけることではないでしょ
うか。

本間：そういう雰囲気作りとか、環境をととのえ
るといふこと、栗田さんのおっしゃっておられる
こととは、違う次元のことのような気がするのだ
す。栗田さんは、自分のこの場所を相対化できな
い、ほかの場所、違った仕方で生きることができ
るのではないか、と問うことすらできないという
ことをおっしゃったと思うのですが、そのあたり
はどう思われますか。

栗田：(そう問うことは)いまだったら思える、い
まだったら言えると思うことができるのです
が・・・(徳永さんの「それだったら手の出しよう
がない」という発言をうけて)けれどもそういう
感覚、「手の出しようがない」という感覚を持って
いただきたいと思います。なんでも手を出せるの
ではなく、手の出せない部分もある、ということ
です。

馬嶋：現場の先生としては、外側から「学校にはもういかなくてもいいんだ」という価値を推進していこうといわれたときに、では教師として現場でどうすればいいのか、ということが見えなくなってしまうのではないかと、思うのですが。

土屋：私はむしろ、そこが落とし穴なのではないか、という気がするのです。つまり教師の側がなんにでも対応しようとするそういうありかたこそ、学校の力を強めてきたのではないかと感じるわけです。

寺田：二枚舌のようにもとられますが、実際生徒を前にしていると、あえてそうせざるをえない、そうしたほうがよい、ということはあるように思います。もちろんそこには欺瞞が入り込む余地も十分あるとは思いますが、難しいことですが、二重の考え方というものを保持せざるを得ない、と思います。そのかわり、生徒と向き合わないもう一つのレベルでは、批判的に考えていかなければならないと思います。

土屋：わたしがいいかかったのは「善意のフォロー」がかえってあだになる、ということです。わたし自身が引きこもりの学生に対して、下宿まで訪ねてみるというようなこともしたのですが、そのときに、こうして彼をフォローしてしまうことで、彼に「行かなければならない」という苦しみをさらに与えてしまう気がしたのです。これは非常に難しいことですが、不登校の子どもの親御さんたちも、みんなが総学校化してしまっていて、何とか学校に行かせてあげよう、という善意でやっていることが逆に（子どもを）からめとっているというところがあるように思われます。どこかでそういう回路を切らない限り、もう救いようがないのではないかと気がします。

「学校」というものを根本的に問う場

迫：僕も不登校の経験があるのですが、不登校というのは「学校に行きたいけれど行けない」ただそれだけのことではないのであって、僕の場合は

「行きたくない」ということを自分から（学校に）言ったという形です。その際に「なぜ勉強しなくてはならないのか」「なぜ学校に行かなくてはならないのか」という非常にプリミティブな疑問を問う場がない、ということを感じました。そうした問題を問いかける場がない、ということが不登校という問題ではつきつけていられるように感じます。そういうことを突き詰めて考えないと、本当に説得力のある答えが出せないと思うのです。

けれども実際にはそういうことを考えている人を認めてくれる場所がない、というのが現状です。（そういう問いを持って）親の会にいても居場所がない、ということもありました。親の会にでていって思うことは、その場にいる人たちが不登校という問題について考え、悩みたい、と思っっているように見えない、むしろ悩みから逃げたいというふうに見えるということです。



畑：そうしたことは私も感じます。「私が嫌なんです」ということを割と平気で言われる親がおられます。子どもの話ではなくて、自分の愚痴みたいになってしまって、最終的には「この状態が、私は嫌なんです」と言われるのです。結局「学校に行けない子ども」は嫌で、一日も早く「学校に行ける子ども」になって「復活」してほしい、というところからしかものをいっていない、ということは多いように思います。

けれども学校を相対化できていて、「学校にいかなくても別にいい」と思っていたはずでも、実際に自分の子どもがそうなったら、平然とはしていらなくなるのです。なにか先の見通せない不安というか、もっと根深い問題がそこにはあるように思われます。親が「学校に行かなくてもいいじゃないの」と言ってあげられたとしても、「じゃあどうする」という答えがどこにもない以上、解決にはならないように思われるのですが。

けれども学校を相対化できていて、「学校にいかなくても別にいい」と思っていたはずでも、実際に自分の子どもがそうなったら、平然とはしていらなくなるのです。なにか先の見通せない不安というか、もっと根深い問題がそこにはあるように思われます。親が「学校に行かなくてもいいじゃないの」と言ってあげられたとしても、「じゃあどうする」という答えがどこにもない以上、解決にはならないように思われるのですが。

本間：本日のテーマは、不登校という事象について様々な立場から語ってみることによって、それがどんな一般的な問題をはらんでいるかを考える、ということでしたが、“同じ”不登校という事象が等質な問題設定に決して収まりきらないことがこれまでの議論を通じて明らかになったことだけでも有意義であったと思います。